
独身ランナー

山際小道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独身ランナー

【Nコード】

N7580Z

【作者名】

山際小道

【あらすじ】

人口論的にも生物学的にも、そして政治的世間的にも結婚相手を女性が選ぶ立場であり、男性は強制的に参加させられ、一方的に選別されるという企画に、世の独身男性達が立ち向かう？物語。

1 (前書き)

思い付きで温めていたモノです。

特に何も考えず楽しんで頂ければ嬉しいです。

名無しではじめてますが、名前がある方がいいとのこと意見があれば
付けます！

近所のスーパーで仕事帰りに嗜好品しこうひんと言う名のささやかな心の癒しを求める男。どこにでもある風景。どこにでもいる存在。そして、どうでもいいと思っている男自身。

彼が買い物カゴに入れたのは翌日に残らない程度の酔いを保証する癖の無い焼酎。調理次第でなんとかなるPB商品の Pasta とソーセージ、ベーコン。値引きされたもやしだった。

商品のバーコードを一度で読み取り、流れるように淀みなくレジを打つ店員。それもまた日常のルーチンをこなす職人の芸と言えなくもなかった。

「ありがとうございますー」
マニュアルどころか、既に条件反射となった台詞を発した彼女の耳に少しだけ毛色の違った言葉が返る。

「…ありがとうございます」
小さくはあったが、無言でもなく「どうも」でもなかった。商品に集中していた視線を一瞬だけ声の方へと向ける。踵かかとを返した客の後ろ姿。彼女の脳裡にはどんな顔だったのかも記憶されていない。しかし、それも日常の「コマ」。煩雑はんざつな合間のことに過ぎなかった。

「ただいまー」

例え義理であっても習慣は変わらない。玄関の扉を開けたときに口にしてしまう。

「おかえりー」

意識はテレビの画面に集中しているが、彼の母と妹も条件反射で返す。ちなみに父は無言だ。

自室でジャージに着替えた彼は台所へと入る。残り物があれば適当にアレンジするつもりだったが、今晚も残って無いようだ。炊飯ジャーにはご飯もない。特に落胆すること無く、まずはグラスに米焼酎。氷を3つ。冷凍保存してある柚子の皮を一欠片入れて軽くかき混ぜる。微かに香る柚子の香り。一口含んで飲み下す。

「ふう」

心身ともに弛緩する瞬間だった。彼の一日の仕事はこの儀式を終えて漸く終わる。

グラスを手元に食事の準備をすすめる。大きめのフライパンに水を張って火にかける。沸騰するまでにもやしを水洗いし、そのまま水にさらす。冷蔵庫を漁ってキャベツとしめじを調達。キャベツはざく切りに、しめじは石つきをとって、ベーコンも適当に切つてまな板の端に待機させた。

フライパンの底に気泡が出始める。塩を小さじ一杯。ソーセージを3本放り込む。沸騰後、パスタを1束半投入。火力はそのまま。フライパンは鍋のように吹きこぼれないので重宝する。

茹で上がったパスタとソーセージをザルにあける。茹で汁はカップに半分ほど残す。フライパンをざつと水洗いし、また火にかける。オリーブオイルを引き、キャベツとしめじ、ベーコンを投入。跳ね

る油を気にせずガーリック、塩、胡椒、レッドペッパーを適量。数度フライパンを返し、だいたい火が通った時点でパスタを戻す。茹で汁も忘れずに。じゅわーっと湯気が立ち昇る。汁気が無くなる前に皿にあげ、空になったフライパンに水を切ったもやしとだしの素、料理酒を入れて蓋をする。しんなりした頃に蓋を開け、生卵をひとつ落として素早くかき混ぜ、皿に移す。茹でソーセージを脇に添え、ポン酢醬油をだばだばと掛けて出来上がり。青ネギが大葉があれば良かったなと呟きつつテーブルへと運ぶ。今夜の彼の夕食である。

実家通いにも拘わらず自炊するのは家族と時間がズレる。本当にただ、それだけが理由だった。そこには夕飯を温めなおしてもらったのが悪いとか、実家に入れる金額が少ないとかいう引け目もあった。

彼が家族と夕食を共にしなくなって既に数年が経つ。大学卒業後になんとか入社した小さな会社は不況という荒波に敢え無く倒産。暫くは失業保険でだらだら過ごしていたが、なんとか契約社員として前の会社に負けず劣らずの小さな町工場で仕事にありつけた。

正社員2名というほぼ家内制自営業のような会社で、契約社員といってもパート・アルバイトと何ら変わることはない。日給換算だったので、仕事のない日は休むように、仕事の多い日はサービスク業にと不確定な職場。時給換算されるアルバイトの待遇の方がマシだった。

それでも彼がその仕事を辞めなかったのは、社長も奥さんも中学生の姉弟も、一家が力を合わせて会社を存続させようとしていたからだ。

「仕事が軌道に乗ったらちゃんと正社員としてお願いするよ」
本当に済まなさそうにそう言う社長。少しおっかないが気配り上

手な奥さん。最近ませてきたものの、忙しい時には文句を言いつつ仕事を手伝う姉弟。いつ帰宅しているのか判らない年配の社員達。

彼はそんな今の職場の雰囲気が好きだった。だからサービス残業も進んでやった。仕事が少ない時には休みを取った。そして、そんな彼に皆が優しかった。

パスタを食べ終えた彼は、グラスともやし炒めを持ってキッチンから居間の隅へと移る。父母と妹がテレビ番組を観ながらあれこれと言っては笑っていた。一昔前までは考えられなかった光景だ。

「ウソツッ！ これ選ぶの？ 絶対左から2番目のヒトの方がカッコイイのに！」

「お母さんならこのコの方が良いと思うわ。キリツとしてるじゃない？」

画面では必死で走って跳んでしている姿。立ちほだかる障害物。不意に襲うトラップ。機敏な追跡者。それらを必死で乗り越え、振り切ろうと汗と泥に塗れる男達。

真剣な表情でモニター上の様子を見る女性へとリポーターがマイクを突きつけている。

「他の組はどうなってるの？」

「ちょっと待ってね」

母の問いに妹がリモコン操作で現在盛り上がっているチャンネルを探す。同じ場所からの放送であるが、複数の組が同時進行しているため各放送局がこの放映権を買い取っているのだ。右端に各チャンネルの現在視聴者数が表示され、妹は最も視聴者の多いチャンネルへ切り替えた。C、Dグループの放映権を持っている民放だ。このリポーターと解説、その後の追跡番組も面白い…らしい。

自作の夕食を口に運びながら母と妹の嬌声を聞く。画面の中と茶の間の興奮が同時に上がっていき、歓声と悲鳴が交錯する。

過去、2度その対象となった彼は苦々しい思いで家族と画面を眺めた。

（まあ、僕は義務を果たしたから…。もう見世物になることもないだろう…）

画面の中の男性達を気の毒そうに観ながらグラスと傾ける。

「（お送り致しましたCグループ2の〇〇さんがお選びになった旦那様はゼツケン番号6番の〇〇さんです！ 決め手は何でしょう？）

「（一番にはなれなかったですけど、彼はすごく頑張っていました！ 泥を拭ったところなんてすっごく格好良かったです！ もう彼しか考えられません！」

「（〇〇さんのお言葉でした！ このあと暫定婚約式が〇〇時より合同で行われます！ それぞれの門出に祝福を！」

女性レポーターの言葉の後CMへ…。少し昔であればここでザッピングになるが各局の協定により一斉にCMへと入る。続きが気になったのか彼の母も妹もチャンネルを変える気は無さそうだった。

（ご愁傷様）

口の端から出たパスタを吸い込んだ彼は心のなかで合掌した。それが一番フラッグを手にしたにも拘わらず選ばれなかった男性に対してなのか、届かないまでも最後まで諦めなかったが旦那として選ばれた見栄えのする男性に対してだったのかは不明だった。

近未来、出生率の激減により国はある政策を打ち出した。視聴率低下に為す術も無いメディアを巻きこんで、一定の年齢に達した独身者達を強制的にお見合いさせるといふ企画。その様子を複数局に中継させ、娯楽としての面を強く押し出すことにより上がり続ける未婚率をなんとかしようという目論見。浅はかだと思われたこの企画はメディア関係者の馴れ合い番組に食傷していた視聴者に大いに受け入れられた。

ヤラセのないガチの結婚事情報道が人気を博したのである。

もちろんそれだけではない。国民の義務として課されたため、様々な理由で結婚に消極的な者への切っ掛けとなり、成立した場合の税制優遇や特別祝い金等が付与され、国家ぐるみの職業斡旋の魅力と相まってたちまち人気番組へのし上がったのである。

民放全社へ放送権を振り分けたのは総務省の陰謀とも天下り確保とも言われていたが、色恋沙汰は万葉の世から人の耳目を集める事柄。陰謀渦巻く内幕の憶測はさておいて広く受け入れられたのもまた事実であった。

この後は競技首位者への賞金授受と、競技成績とは関係なく成立した婚約組のインタビューである。相手探しとして参加した男性が一番にも拘わらず選ばれないのはとんだ晒し者であるが、優勝者にはそれ相応の賞金と国からの職場斡旋がある。結婚ではなくそれを目的とする男性が多いことも事実であった。

ともあれ、番組の主人公は結婚相手を選ぶ女性であり、成立した婚約組である。競技優勝者の賞金授受はさらっと流され各局ともマイクを片手に局員が走り回っていた。

そんな画面を冷ややかに観る彼に母から爆弾が投下される。

「あんだ宛に来てたわよ。『赤紙』」

さらつと言われたが、彼には予想外だつたため咽そうになるパス
夕を焼酎で無理矢理流しこむ。

「なんでっ？ 僕の義務はもう終わったはずでしょう！」

「あれっ、お兄ちゃん知らなかったの？ 先週参加対象が拡大した
んだよ！ 良かったじゃない！ まだチャンスはあるって！」

恐慌に陥る彼に妹が人の悪そうな笑みを向ける。妹なりの応援な
のだが彼には知る由もない。

「…もう2回も参加したのになあ。甲乙落ちしてるのに新たに『丙^{てい}』
粹作るなんて…」

過去2回の参加で国民の義務を果たしたはずのつもりが、またも
や巡ってくる過酷な運命。恋愛結婚を理想とする彼にとってこの義
務は苦行でしかなかった。

ただ、失恋の痛手が尾を引いたまま、新たな恋愛に対する努力が
皆無であったのが両親や妹の目にも明らかだった。そのため今回の
法改正による彼の参加は家族にとってはまさに最後の好機と思っ
ている。

「文句言わないで頑張ってきてよ！ 私の結婚式にまだ独身の兄を
紹介するなんて嫌だからね！」

既に婚約相手がいる妹の激が飛ぶ。

少々見栄えが悪く、稼ぎも少ない兄であるが、優しいことだけは
間違いないのに結婚相手が無いことを不満に思っている妹である。
前2つの条件が致命的だと気付かないのは身内贖いの故かもしれない。
い。

3週間後。彼は富士の裾野、自衛隊演習場を増築してその片隅へと建設された施設。富士総合お見合い紹介場。別名『強制結婚場』の選別所と言われ、赤紙により徴集された独身男性の控え室にいた。別室には、軽食を用意されながらも緊張して自分達の順番を待つ独身女性達の姿があつた。

レポーターが眼に付いた女性達にマイクを向け、

「今のお気持ちは？」

決まり切った定型文であるが、答えは女性の数だけ違う。期待に拳を握る者。参加者のデータを比較する者。初めて見る男性の容姿を今か今かとモニターを睨む者。様々であつた。

1 (後書き)

短編のつもりが…続いてしまった…良いのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7580z/>

独身ランナー

2011年12月24日22時46分発行